
GoodRack

鳥丸。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Good Rack

【著者名】

鳥丸。

【あらすじ】

学校に突然閉じ込められた生徒たち。それを襲う何らかの存在。彼らは無事に脱出できるのか。

第1話、全ての始まり

朝は昔から苦手だ。でも今はそんなことを言つていられない。今思えば今日は珍しく早く起きたのが悪夢の始まりだつた。・・・・・。いつもは一時間以上遅く起きるのに今日は目が醒めた。一人で朝食を食べて学校に向かつた。いつもは一人だけの道も今は通学時間、人がいっぱいだ。学校に着くなり先生に言われた

「お前が遅刻しないで来るなんて！これは何かおきるな」

嫌みだ。そんなことを聞きながら教室に入る。みんな俺を見て驚いている。気にしないで挨拶する。

「オハヨー巧」

俺の親友

「おっす。信一」

親友だ。大体の友達に挨拶をする。席に座るとチャイムがなると同時に先生が入る

「はい。席につけよ」

それからはいつもと変わらない日常を過ごして放課後になつた。さつさと帰るかな・・・その時先生に呼ばれた

「おい！一覧お前いつも遅刻してるんだから掃除を手伝え！…」

歯向かつても仕方ない。渋々掃除をしていると部活に行く信一と巧がいた。二人はバスケを頑張っている。俺も本当なら・・・悔しく思いながら掃除にはげむ。気がつくと回りに入気がない。少しサボるか

「だるいなア」

愚痴をこぼす。まだ先生が終わりだと言いに来ない・・・もう口が沈む。

「なんで来ないんだよ！…」

職員室に行こう。さすがにこの時間は生徒はいないな。職員室についたが誰もいない・・・なぜ！？とにかく先生を探そう。まずは

部活をしてるだらうから体育館に行こう。なぜ誰もいないんだ！？少し恐怖を感じる。行く途中にも会わなかつた・・・体育館に着いたが凄く嫌な予感がする。感じだことはないがこれが殺気なのかなあと思った。恐る恐る扉を開く。扉を開いてからより殺気が強くなつた感じがする。

第2話、出会い

体育館は真っ暗だった。人気はあるが誰がいるかわからない。部活をしているはずだから巧と信一がいるはずだ。

「巧！－信一－！」

携帯の明かりを頼りに体育館に入る。

「誰もいないのか！－？」

返事はない・・・あまり長くいたくない。出口に立って外に出ようとしたとき突然足音が近づいてくる。振り向くが体育館は暗闇で何もわからないが誰かの足音がする。

「誰だ！－！」

体育館に響く。

「覓か！－ビーにいるんだ」

巧だ。

「！」つちだ！－！」

携帯の明かりをつけた。足音が近づく。

「扉を開けてくれ！－！」

言われ急いで扉を開く。勢いよく飛び出した巧は出た所で転倒した。

「はやく、早く閉めろお！－！」

急いで閉めようとした時に紅い眼をした何かを見たような・・・扉を閉める。巧に駆け寄る。足から血を流している。

「大丈夫か！－？」ととりあえず保健室に行こう。

肩をくんで歩く。保健室まで巧は何も喋らなかつた。廊下にも保健室にもやはり誰もいない。保健室に入り消毒剤と包帯を持って巧を椅子に座らせる。

「少し痛むけど我慢しろよ

巧は何も言わずに痛みに耐えていた。包帯を巻きながら巧に聞いてみた。

「体育館で何があつたんだ？？信一たちはどうした？？」

巧は何も言わなかつた。だから黙つて包帯を巻いた。巻き終えると同時に巧は深く息をして語り始めた。

「突然だつたんだ・・・アイツが来たのは」

「箕は思わず

「アイツって？？」

巧は無視して

「いきなり体育館が真つ暗になつて何がなんだかわからない時に誰かの悲鳴が聞こえたんだ。悲鳴の方向を見たら・・・あの紅い眼のアイツが見えたんだ。次々に悲鳴が聞こえて・・・恐くて何かの物影に隠れたんだ。そうしたら箕が来てくれたんだ。」

巧は震えていた。信じれなかつた。そんなことが起つるなんて・・・ゆつくり息をして立ち上がる。

「歩けるか？？とりあえず職員室に行こ」

巧はうなずき歩きだす。

第3話、仲間

職員室にはやはり人気がない。何故なんだ……仕方ない。学校の外に助けを求めて行こう。下駄箱に行き、扉を開けようとしたが開かない。

「なんであかないんだよ！－！巧手伝つてくれ」

二人がかりで必死に力を入れるが開かない。窓も開かない、割ることを出来ない。何故だ！－！全てがおかしい。完全に俺達は閉じ込められた。巧は震えている。

「そうだ！－！携帯で連絡しよう」

巧も携帯を出し電話をかける。・・・・・全然からない。メールも送れない。連絡手段がない。今にも狂いそうな巧を連れて職員室に戻る。人気がある。物音を聞きとつさに隠れる。覗いてみると二人の女子が見える。・・・どうしよう。俺達と同じ状況なら協力するべきだな。職員室に入る。

「きやあっ」

女子が悲鳴あげる。こつちもビックリする。

「ちょっと、俺達は普通の生徒だよ！－！」

女の子は驚いていたけど落ち着いて俺達を見た。状況を聞くとやはり俺達と同じだった。俺達以外にも仲間がいたことは正直嬉しかった。みんなで職員室の椅子に座った。

「まず自己紹介しとくな。俺は筈　　一一一年生だ」

次は巧が

「俺は窪塚　　巧範と同じ一年だ」

女の子一人は

「私は佐藤　　恵　　一年生です。」

「私は敷島　　瑠璃です。（しきしま　　るり）恵と同じ一年生。」

みんな自己紹介を終わった。もう時間は午後9時だった。こんなに遅くまで学校にいたことはない。

第4話、遭遇

四人もいたら少しは安全だ。

「二人とも状況はわかつてゐるよね？？」

「二人とも頷く。

「みんなは何か知つてゐることは伝えて情報を集めよう。俺達が知つてるのは・・・」

巧が話しをしたことを話した恵と瑠璃は怖がっていた。

「二人は何か知つてゐる？？」

恵が答える。

「私達は・・・」

語り始めたとき、廊下の電氣が突然消えた。叫びそうになる恵と瑠璃の口を箒と巧はふさぐ。

「しいーっ」

二人は頷く。足音はしないが何かがいる。四人は机に隠れて扉を見つめる。殺氣が体を締め付ける。緊張で汗が止まらない。いくら時間が経つたかわからない。ふつと廊下に明かりがつく。緊張の糸が切れて座りこむ。

「なんなんだよ！？」

恐怖が体から抜ける。一息ついて恵が話しかけたことを聞く。

「私達は誰もいないから職員室で待つてたんです。そしたら先輩たちが来たんですよ」

情報となるようなことはなかつた。ゆっくりしてゐる暇はないようだ。またアイツが来たら何が起ころるかわからない。大変なことが起ころるのは何となくわかる。

「さあ、ここから脱出する方法を探さないとな」

何からしていいのかわからないが、とりあえず全ての窓も扉も開かない。絶対に普通のことじやない。あとは紅い眼のやつが何かもわからない。学校の出来事なんだから少しぐらい資料があるはずだ。

「何か手掛かりがないか探そう。職員室なんだから何があるだろ？」

みんなは机の上のプリントや引き出しを開けて捜す。大体の所は調べた。あとは校長室だ。四人は校長室に入った。

第5話、新たな仲間そして・・・

四人は校長室に入った。暗く嫌な雰囲気だった。電気のスイッチに手をかけたとき何かが動いた。とっさに電気をつけた。

「ああっ！」

叫びにも似た声がする。まぶしさにもなれたときその声の主がわかつた。同じクラスの渉だつた

「渉じゃないか！」

渉は暗闇でいたからまだ光りになれてなく

「誰だつ！！殺さないでくれっ！！」

叫びながら暴れている。

「落ち着け！！俺だ覓だよ！！」

落ち着かせようとする。

「覓！？」

目が慣れたのかみんなを見る。手を貸して立ち上がらせる。

「お前も閉じ込められたのか」

仲間が増えているのは嬉しいがみんな脱出方法をしらない。

「渉、誰か俺達の他に人を見たか？？」

巧が聞いてみた。

「3人ぐらい知らない人を見たよ。」

やつぱり俺達以外にも閉じ込められてる人はいる。探さないと、みんなでいた方がいい。でもどうやって探す！？むやみに歩いても見つかるかもわからないし、アイツに見つかるかも、ならどうする。

「他の人も見つけないと、何かいい方法はないか？？」

みんな考えるがいい案がない。その時、瑠璃が

「校内放送・・・そうだ！校内放送ならどこにも行かないでみんなを集めるができるんじゃない！！！」

みんなが納得。放送室は職員室と繋がっている。よし、行こう。覓と瑠璃が出ると校長室が閉まる。

「おこ…逃げしたんだよ…なんで閉めるんだよ…」

中から

「知らないよ！開かないよ…！」

必死で扉を引くが開かない。その時、

「先輩！！廊下の電気が…！」

窓が振り向くと廊下は真っ暗だった。

「瑠璃ちゃん逃げるぞ」

手を握つて逃げる途中に職員室の電気が消えた。ヤバイ…音も無く何かが入つてくるのがわかる。瑠璃の手を握つて記憶を頼りに走る。

第6話、離れ離れ

途中に椅子につまづき転倒する。後ろを振り返ると紅い眼のアイツが後ろから接近している。

「瑠璃、早く行くぞ！」

起きて瑠璃の手を引き走る。

何かの扉についた。

瑠璃を先に入れて、筧が入るのとしたとき背後に激痛と共に嫌な予感がした。必死で中に入る。扉を閉め瑠璃が鍵を閉める。轟音と共に鉄の扉が変形するが何とか耐えたようだ。何か緊張がとけて電気はついたがまだ職員室に誰がいるのはわかる。瑠璃は筧を見た。背中から血を流し倒れている。血を見て意識をとびそうになりながらも何かをしよう。部屋を見回すと救急箱があった。

「先輩！大丈夫ですか！？」

筧は薄れゆく意識のなかで瑠璃の声を聞く。

「大丈夫じゃないけどまだ死なないよ」

少し冗談を言つたつもりだけど笑えない。

「応急処置が出来そなんでしますね。」

消毒剤とガーゼと包帯を取り出す。

「少し痛みますが我慢してくださいね」

消毒剤のふたを開く。

「もうつ、これ以上痛いことなんてないわ」

消毒剤の冷たさを感じたと同時に予想以上の痛みが背中を襲つ。

「ぐつ！あつ」

激痛に耐えようとすると声が出てしまう。

「頑張つてください、先輩」

励まされても痛みは変わらないのが現実だ。消毒が終わり包帯を巻いてもらひ。とりあえず、ゆっくり休むことにしよう。巧たちはどうしててるかな。心配だ。・・・・・筧と瑠璃と別々になつてから何も

出来ない自分達がいた。

「くそつ！大丈夫か！？？算？？！」

声は聞こえないが職員室からは何かが倒れる音が響く。生きててくれ。それしか願うことはなかった。扉の外からは金属音が響いた。そどが静かになり嫌な予感がよぎる。

第7話、関係と再会

「恵が叫ぼうとしたときに巧は口をおさえて
「アイツにバレる」

耳元で言つて泣きそうな恵を抱きしめる。職員室の電気がついた。
もう出ても大丈夫かな。渉が扉を少し開けて首を出して覗いたとき、
電気が消え渉が倒れる。

「大丈夫か！？」

体をひっぱり中に入れると首がなく血が床に広がる。

「きやあああ！」

恵が震えながら尻餅をつく。

「くそおー！なんなんだよーーー！」

扉をしめて巧は叫ぶ。恵に近づき隣りに座る。恵は震えている。肩
を抱き二人ようそう。初めて見る死体に動搖を隠しきれないが今は
自分が取り乱したら駄目だと言い聞かせて恵を抱きしめる。

「大丈夫！大丈夫だから心配するな！俺が守つてやる」

恵は泣きながら抱き付く。優しく抱きしめる。さあこれからどうす
るかな。職員室はまだ暗い。筧と離れてからいくら時間がたつたか
わからぬのがかなり時間が経過したと思う。巧は大丈夫かな。・・・
・・・・・

大分背中の痛みが無くなってきた。瑠璃は疲れたのか眠つている。
筧にもたれて眠る瑠璃の顔は安心していた。筧はその顔を見て安心
していたら職員室の何かが破壊される音がした。びっくりして飛び
起きる瑠璃。

「大丈夫。ここは安全だよ」

瑠璃は筧の胸に顔を埋める。

「先輩少し眼閉じてください。」

筧は眼を閉じる。唇に柔らかい感覚がした。思わず眼を開くと眼を
閉じた瑠璃がいる。キスなんて久しづりだ。

「瑠璃、俺が絶対に守つてやる」

瑠璃は赤面しながら寛に抱き付く。その時、職員室の電気がついた。やつと合流できる。扉を少し開けて外を確認する。もうアッシュはないようだ。・・・・

巧は恵を抱きしめながらいくら時間が流れたかわからないがずっと二人で抱き合っていた。言わずしても一人は心が通い合っていた。その時扉から光りが漏れた。慎重に職員室を覗く。もう何もない。部屋から恵と共に出ると寛と瑠璃も手をつないで立っていた。

第8話、理由

扉が壊れ散らかる職員室でやつと四人は集まつた。

「涉はどうしたんだ？？」

筧が気付いて問い合わせると巧は下を向いて

「涉は・・・アイツにやられた・・・」

校長室を指差した。扉のしたから真紅の血が床に広がつていた。瑠璃の眼を隠した。憎しみにも恐怖にも似た感情が沸き上がる。一人減つた四人でもう誰も死なせないでここから逃げようと決めた。状況は悪くなるばかりだがここで居ても始まらないと思つた。放送室行つて人を集めよう。

「ザーツ」

校内にアナウンスが響く。

「んつん！校内に残つてゐる人へみんな力を合わせて脱出しよう」放送をして待つしかない。誰か集まつてくれと心から願つた。四人で固まつて廊下を見つめていた。

「・・・助けてえ！！」

誰かが走り抜けたと同時に後ろの電気が消えた。またアイツか！！

「逃げるぞ瑠璃！」

「逃げるぞ恵！」

四人は先に走つた奴を追い掛けながら逃げた。学校の中を全力疾走しながら四人はどこかの教室に飛び込んだ。アイツは俺達を追い掛けずに先に行つた奴を追つた。・・・・・

「やつ！やめる！！あああああ！！！」

叫び声とともに床に何かが落ちる音がした。飛び込んだ教室は何かの資料室のようだつた。何かはわからなかつたがFAXを発見した。そこからは用紙が出たままになつていた。瑠璃が書いてある文章を読んだ。

「もう時間がない。アイツがまた蘇つた。これに気付いたもの達よ

早く校内から逃げる。だつて

なるほど。学校に先生がいないのがわかる。

「俺達は逃げ遅れただんだ」

誰もいらない理由がやつたわかった。

第9話、決心

みんながいない理由がわかつても脱出の方法がわかつていな。ここには重要な資料があると思つた。

「ここには絶対に必要な資料があるはずだ。手分けして搜すぞ」以外に狭い教室だから早く搜せそうだ。学校の重要書類が大量にある。なかなか探してるもののが見つからない・・・

「ねえ、巧これは？？」

本を数冊取つた後ろに小さな黒い箱が出てきた。

開けてみると黒いファイルが入つっていた。

四人で集まつて一緒に見た。

「9月13日、生徒^{からすま}鳥丸明美^{あけみ}がイジメにより自殺をしようとしたが先生に止められ一命をとりとめる」「9月20日、鳥丸明美は男子生徒たちに体育館で乱暴をされ、自殺をした。」「12月20日、鳥丸明美を乱暴した男子生徒が変死をとげた。」「1月10日、乱暴やイジメに参加した生徒が全て変死をとげた。」「2月1日、1ヶ月下旬から生徒、教員の間から

「鳥丸を見た」

と報告が増えた。

」「3月13日、最初の監禁が起こる。犠牲者は13人、警察に調査を依頼すると犯人の指紋は鳥丸明美と判明。事件は迷宮入りした」「4月11日、2回目は起こる前に予告があつた。生徒への連絡が出来ず18人の犠牲者が出た。」「5月13日、鳥丸明美を止める術が見つかつた。その方法は体育館に・・・・」そこはちぎれていた。みんなはかなりショックだつた。

「くそつ！！なんでだだよ」

巧が立ち上がり本に八つ当たりした。

「やめて！落ち着こう」

恵が止めた。寃は考え方をしていた。

「ー?..どうしたの?..」

瑠璃が問い合わせる。

「体育館に行けば何かわかるかも知れないんだよな。なら行くしかないんじゃないかな」

筧は答えた。でもそれは危険をともなう事なのはわかつてゐる。

「もつもつといい方法があるよ・・・」

瑠璃は筧の手を握り少し涙ながらに言つた。でももつ決まつていた。

俺がみんなを助けると。巧も筧の言葉を聞いて気持ちは固まつた。

第10話、別れ、そして

本棚を挟み別々になる二組。

「瑠璃聞いてくれ、俺は君を守ると言ったよな。だから俺はアイツ、鳥丸明美を止めるよ。だからここから出たらいつぱい思いで作ろう」

笑顔で言つたが内心不安でたまらない。瑠璃は泣きながら筧に抱き付く。

「一、絶対に生きててね」

瑠璃は筧とキスをした。巧と恵は無言で抱き合っていた。

「恵、俺はここまで人を好きになつたことがなかつた。でも俺は絶対に恵を失いたくないだから俺は守るよ」

恵は何も言わずに抱きしめた。一人とも決心が固まつた。この部屋は安全だと資料に書いていた。だから瑠璃と恵を残して行くことに決めていた。

「巧、行くか」

二人に別れを告げて部屋を出る時に瑠璃と恵はいい言葉が見つからなかつたふつと四人の頭に浮かんだ言葉をみんなで同時に言った
「Good Rack！」

みんなで最後は笑顔で別れた。廊下には何も気配は感じなかつた。

「早くいくぞ！行けば何かわかるはずだ！」

巧は頷き走り出した。廊下は恐ろしく静かだつた。体育館までに何もなく行く事が出来た。体育館の前についた時恐怖で足がすくむ。！！何かに飛ばされて中に無理矢理入れられた。

「痛つて！！なんだ！？」

回りは暗闇で何も見えない。

「筧！！大丈夫か！？」

巧の声がする。

「ああ。大丈夫だ」

声しかわからない孤独感が体を支配する。右も左もわからない状態で何が出来る？？わかることは巧が近くにいることそして鳥丸明美も近くにいることだつた。

「鳥丸明美！！いるなら姿を見せろ！！」

勇気をだして叫んだ。紅い眼が突然現れると同時に体育館に明かりがつく。巧はすぐそばで立つていた。ステージの方を見ると一人の髪の長い女子生徒が立つていた。鳥丸明美。

「なぜ・・・名前を・・・知ってるの？？」

悲しげな声だつた。

「学校の資料を見たからだ」

今はなぜか恐怖は感じなかつた。

「私は・・・誰も殺すつもりなんてなかつた・・・」

涙がこぼれた。

「ならどうして何十人の生徒を殺した！？」

巧が聞いた。

「私は・・・呪われている・・・その呪いを・・・解いて」

言つてる意味がわからぬ。

「どうすればいいんだ！？？」

巧は聞き続けた。

「私は・・・知らない・・・」

言い終わると回りが暗くなつていく。

「巧、倉庫に逃げるぞ。」

走つて倉庫に駆け込む。もうその時は鳥丸明美は眼が紅く人ではない感じがした。

第1-1話、調査

倉庫内は道具やマットなどが並ぶ。ここは鳥丸明美が自ら命を断つた場所だった。扉の前に道具を置きバリケードを作る。

「これからどうするんだよ！！」

巧が最後に飛び箱を置きながら聞いた。

「考える！！慎重に」

巧はいろいろしながら覓をみた。覓は腕を組みうろついて歩いている。「んっ！…これって見てみる！！」

道具の中にあつたと思うジュースが倒れている。こぼれたジュースが床に広がっているのにここだけ一直線に途切れている。近くにほこりで見えなかつたが掘めそうな凹みがある。

「ここに何かあるかもしれない！！」

二人で力をいれ床を開ける。その間も倉庫の扉は破壊されかけている。必死で開くと階段が続いている。階段を覓が降りようとしたとき扉が破壊された。もう長くはもたない。巧も降りて床は閉まった。真つ暗だが携帯のあかりを頼りに下る。早くしなければ足元がわからない状態だが急いで下つた。やつと階段が終わり広いところに出た。

「鳥丸は来てるか？？」

「いや、大丈夫だ」

二人とも息が荒い。ゆっくり歩きながら足元を見ると真っ赤な液体が広がっている。血だ。辺りを照らしてみると大量の死体がある。見覚えのある人もある。そこに！！

「信ー！…信ー！…！」

親友が何も言わずに倒れている。涙が止まらない。でもまだ泣く余裕はない。

「信ー！…絶対に仇をとるからな」

何も言わない信ーを残してはしつた。奥には扉があり重たい扉を開

も中に入るとアリババ・・・・

第1-2話、解放

そこには見たことのない花が咲いていた。血のような真紅の花だった。

「なんだ!? ここは! ! !」

ここに何かの秘密があるはずなんだ。後ろの扉が開く。

「私を・・・解放して・・・」

紅い眼ではなく普通の眼だった。

「なら、どうしたらしいんだ! ! !」

いくら聞いても答えてくれない。冷静になれば何があるはずだ。鳥丸は人を殺すことは望んでいない。なら何故殺すのか。

「鳥丸、君の中には他に違う何かがいるのか? ?」

これしか考えられない。幽霊とか呪いとか全然信じてなかつたけど、こんなことは化学的に証明できない。

「私・・・死んだ・・・ときには・・・みんなを・・・怨んだ・・・でも・・・こんな・・・ことしたく・・・ない」

鳥丸は涙を流した。

「なにか方法はないのかよ! ! !」

巧は問い合わせる。眼が紅くなりはじめた。

「また・・・私じゃ・・・なく・・・なる・・・」

鳥丸ではなくなつた。

「鳥丸の中に潜むお前は誰なんだ! ! !」

鳥丸じやない存在は

「我、この娘の怨念を喰らう者」

なんなんだよ。正体がわかつても何もできねえよ。紅い眼にのそいつは俺達をじつと見てている。体が動かない。回りを見ると木の棒と割れた硝子が落ちている。やるつきやない。その時、「何を! ! !するのだ! ! !」

鳥丸は頭を抑えて倒れる。

「早く・・・私を・・・殺し・・・て」

そう言い残したま紅い眼に変わった。巧を見るところちらを見て頷いた。硝子の破片を握りしめて走り出す。筧は木の棒を構える。巧は鳥丸の心臓に破片を突き刺す。鳥丸は巧の腕を掴み

「一人では死なん！！」

巧の腕を片手で握り潰す。

「ぐああ！！ちくしょう！」巧は破片をさらに突き刺す。もがきながら鳥丸は手を離した。鳥丸の背中から何かが出てくる。同時に地震がおこる

「巧！！逃げるぞ！！」

走つてそこから出て扉をしめる。

第13話、朝日

扉の奥で崩れる音がした。「こも安全だとは限らない。信一は・・・運んでいる暇はない。いくつもの死体を見ながら走った。階段・・・かなり長い。疲れながら上がる。一人で重たい床の隠し扉を押す。先に筧が出た。巧が出ようとしたとき足元の階段が崩れる。

「巧！」

筧は巧の腕を掴んだ。

「筧！！」

二人とも力が入らない。

「絶対にあきらめるな！！俺は放さないぞ」

筧は巧を励ました。巧も力をふりしぼり上がる。やっとの思いで登ってきた。扉をしめようとしたとき、

「ありがとう・・・」

と聞こえたように感じた。鳥丸明美が最後にお礼を言つたのだと思う。扉をしめてしつかりと鍵をしめた。一度とアイツを蘇らせないために。血が大量に残る体育館を出て荒れた廊下を通り瑠璃や恵がいる資料室に向かつた。扉を開けると同時に一人が飛び出して抱き付く。

「ーーーーー！やつと、やつと会えた」

涙を流しながら喜ぶ瑠璃。

「俺も会いたかった」

「おかえり、遅すぎよ」

とだけ言つて強く抱きしめる恵。

「ただいま、待たせすぎたな」

みんな生き残つた。幸せを噛み締めるみんな。大量の犠牲が出てしまつたけど俺達は生き残つた。鳥丸明美も解放してもう恐れることはない。

「さあ、外に出よう。」

廊下をぬけて玄関から外にでる。開かなかつた扉を開き外へ・・・。
辺りを光りが包んだ。朝日がのぼつてきた。最高に綺麗な朝日だつ
た。

ENDとだけ言つて強く抱きしめる恵。みんな生き残つた。

「さあ、外に出よう。」

廊下をぬけて玄関から外にでる。開かなかつた扉を開き外へ・・・。
辺りを光りが包んだ。朝日がのぼつてきた。最高に綺麗な朝日だつ
た。

EN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5152a/>

GoodRack

2010年11月29日07時32分発行